

道内各地で進展する地方創生プロジェクトの最前線をクローズアップ！

北海道創生ジャーナル

創る

Vol. 32

2026.10

その先の、道へ。北海道
Hokkaido.Expanding Horizons.

CONTENTS

【写真】森町 洋酒樽への活用を目指すミズナラ材

01 特集

～「顔が見え、熱が伝わる」実効性ある支援を展開～ 地方創生伴走支援制度

森町／「森林資源×地域産業の可能性を広げるためのミズナラを活用した洋酒樽生産への挑戦など、町の資源をいかした取組への伴走支援」

むかわ町／「北海道胆振東部地震からの創造的復興・創生へ！むかわ町の多核共創による未来へつなぐまちづくり」

05 地域が動く・プロジェクト最前線

■増毛町 ～オール増毛で取り組む～「増毛×レトロ」山の恵みプロジェクト

07 地域のキーパーソン

浦幌町／小松 輝さん

下川町／特定非営利活動法人 森の生活

09 地域を創る人づくり

北海道MA+CH(学び舎+地域)プロジェクト

知事が地域訪問する機会に地域で活躍されている方をお訪ねし、その様子を紹介

11 「なおみちカフェ」から ～地域創生のヒントを探る～

■宗谷編 中頓別町のワイン造り

■後志編 北海道留寿都高等学校

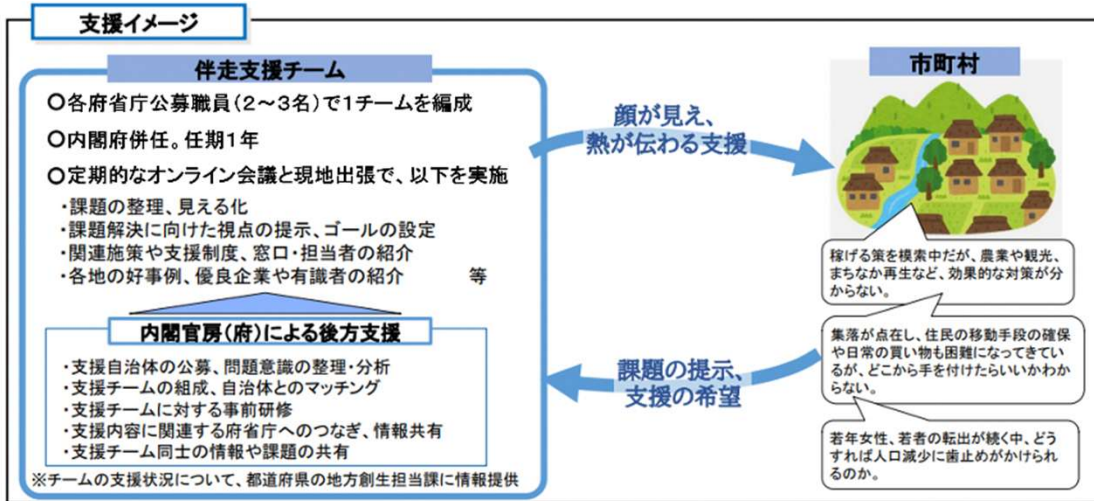
地域に新たな風を吹き込む

13 地域おこし協力隊へのインタビュー

■北広島市地域おこし協力隊 辜 佳慧さん

■釧路市地域おこし協力隊 岩元 大記さん





特集

地方創生伴走支援制度

「顔が見え、熱が伝わる」実効性ある支援を展開

制度概要

国の「地方創生伴走支援制度」は、地方創生の推進を目的として、府省庁の本省職員がこれまでの職務経験等をいかして副業的(※)に担当の市町村の地域課題の把握や施策立案等の助言等を行うもので、この制度を通じて、市町村の自主性と創意工夫に基づく地域独自の取組の後押し等を進めています。支援対象は、地方創生に関する課題を抱える中小規模の市町村(人口10万人未満)のうち、本制度の活用を希望する市町村です。申請する市町村の課題は特に指定はなく、地方創生全般や観光、産業振興などの多様な分野から優先して取り組む分野を選択できます。ただし、各市町村の職員が本来行うべき業務(例えば、国庫補助金の申請書類の作成など)は伴走支援業務の対象外です。

伴走支援業務を行う国の職員は、全ての府省庁等の本省(外局を含む)の常勤職員等であって、指定職から係長級相当以上までの者を対象として、内閣官房・内閣府の実施する公募で選定された者が地方創生支援官となります。

(※)本省での業務に加え、伴走支援業務に従事

選定された支援官は、自治体の問題意識を踏まえ、内閣官房(府)においてマッチングされ、2～3名の各省庁混成の「伴走支援チーム」が編成されます。

「伴走支援チーム」は、それぞれ1つの市町村を担当し、定期的なオンライン会議や現地訪問を行い、担当する市町村の抱える課題解決に向けた助言等の支援を行います。伴走支援業務は、地方創生支援官の勤務時間の1～2割程度での実施を想定しており、具体的な活動は、定期的なオンライン会議(例…毎週1時間程度等)や四半期に一度程度の現地訪問を想定しています。なお、伴走支援制度に係る旅費や公務災害対応、情報端末の配備などは、国において行つたため、各市町村の対応は不要です。

このように、「定期的なオンライン会議+現地へ足を運ぶ」ことにより、市町村ごとの支援テーマを定め、「顔が見え、熱が伝わる」実効性ある支援を展開しています。

支援実績

本制度を初めて運用した令和7年度は、地方創生支援官として約180名が60のチームを編成し、希望した伴走支援自治体の支援にあたりました。

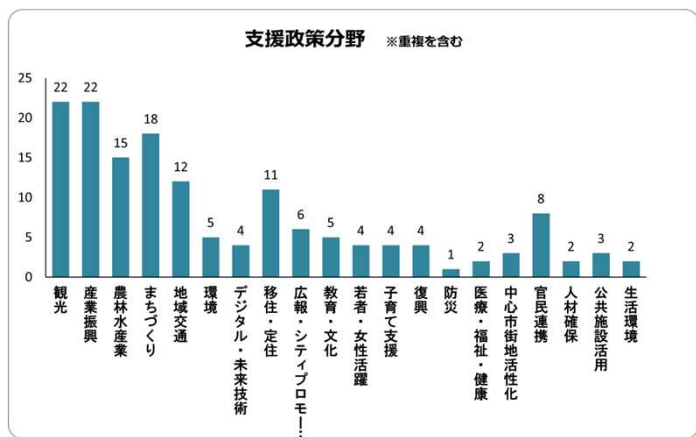
支援市町村	支援テーマ	政策分野
森町	森林資源×地域産業の可能性を広げるためのミズナラを活用した洋酒醸生産への挑戦など、町の資源を活かした取組への伴走支援	産業振興 農林水産業 若者・女性活躍
余市町	ソーラン節発祥の地・余市町の魅力発信! ～ワインを核とした食の魅力を発信、町内外の人々の新たな交流拠点づくり～	観光 産業振興 子育て支援
美瑛町	産官学金労言で実現する「生きがい、映える。」:丘のまち美瑛町の持続可能な農業と観光の共存に向けて	観光 農林水産業 人材確保
天塩町	新たな酪農担い手確保・創出のための官民協働での「天塩型放牧酪農スタイル」による担い手確保・人材育成～酪農事業承継モデル構築	産業振興 農林水産業 人材確保
むかわ町	北海道胆振東部地震からの創造的復興・創生へ!北海道むかわ町の多核共創による未来へのつなぎづくり	まちづくり 復興 中心市街地活性化
鶴居村	「日本で最も美しい村」タウの故郷の挑戦～日本初の官民連携で取り組む本格的なアドベンチャー・トラベル事業へ～	観光 農林水産業 官民連携

道内においても、令和7年度は6町村が支援を受け、令和8年度は11町(新規7町、継続4町)が制度を活用しています。



▲現地訪問の様子

【令和7年度 支援テーマ】



出典：内閣官房地域未来戦略本部事務局「地方創生伴走支援制度」

支援政策分野

令和7年度は、60チームが多様な政策分野からなる地域課題を支援テーマに設定して伴走支援が行われました。主な支援政策分野の構成は、観光が22チーム、産業振興が22チーム、まちづくりが18チームと、多く設定されています。

道内における支援市町村でも、農林水産業、観光、産業振興の支援テーマを中心に設定されました。

活動評価

令和7年度に活用した自治体からの全体評価は平均4.6（5段階評価）と、概ね高い評価が寄せられ、さらに約8割が翌年度以降の継続的な活動を希望しました。

支援にあたった支援官自身も全体評価

が平均4.3と、約9割が地方創生の現場に携われることを評価する結果となりました。

また、「多様な支援先市町村での伴走支援チームの取組は、いわゆる「触媒」として地域の活性化を起こしやすいとする。」という評価が寄せられ、地域の活性化に向けて、伴走支援チームでは、新たな視点の提供、スピード感ある対応や、「よそ者」として地域の多様な主体の連携を実質化するなどの役割を發揮しています。

道内活用市町村の評価

令和7年度に活用した道内市町村による情報交換会では、支援テーマの設定について、「課題をはっきりさせていない状態で申請したが、支援官に町の課題を相談し、整理しながら最終的なゴールを決めた。」「テーマを決めて申請していたが、実際に支援官が町を見て感じた課題などから複数のテーマに取り組んだ。」など、もともと町が抱えていた課題への対応や、支援官の気づきによる取組をテーマに設定し、支援を受けたとの報告がありました。



▲町内関係者と支援官との意見交換会の様子

また、「支援官が庁内や議会等の内部説明などに「外部目線」として入ることで、議論が活発になった。」「内部だけでは進まない話も、支援官が入ることで円滑に進んだ。」などの内部調整への影響に関する意見や、「補助金活用提案や民間企業とのつながりなどにより、新規プロジェクトをスピード感を持って進めることができた。」など、課題解決につながったという評価がありました。

支援官の配置については、「申請時の支援テーマに精通した支援官が来ると思っていたが、別分野の出身省庁の支援官だったので、最初は戸惑った。」や、「初年度は町の情報のインプットで終わってしまうので、複数年の制度活用を希望したい。」という意見がありました。制度活用にあたっては、「支援官は一緒に仕事をしていく仲間だと思うので、積極的に意見交換を行い、何でも言い合える仲になった方がよい。」や、「支援官は副業なので、どこまでお願いしてよいか判断が難しかったが、あまり遠慮しないで思ったことを何でも相談した方がよい。」などと、今後活用を検討する市町村に向けて、意見がありました。

◎令和9年度「地方創生伴走支援制度」の活用については、12月に内閣官房地域未来戦略本部事務局及び内閣府地方創生推進室から通知する予定です。

◎制度は変更が生じる可能性があります。

担当支援官の声



内閣府 地方創生推進事務局
内閣官房 地域未来戦略本部事務局
参事官補佐 大矢 和樹 氏
(雄武町支援官)

私は北海道雄武町の伴走支援官を務めております大矢和樹と申します。現在、内閣官房地域未来戦略本部事務局において、地方創生を含む地域未来戦略の推進に携わる一方、自治体の現場に寄り添いながら課題を捉えたいとの思いから、地方創生伴走支援制度に応募いたしました。また、過去に北海道財務局へ出向した経験があり、北海道には特別な思い入れがあり、ご縁もあり、雄武町の伴走支援官を担当しております。

雄武町は豊かな自然に恵まれ、漁業や酪農を中心とする産業が地域を支える魅力ある町ですが、全国の多くの地域と同様に人口減少という課題に直面しています。町ではUターン支援の充実や道の駅をはじめとする地域施設の活用・整備などに取り組んでおり、私も伴走支援官として、少しでも有益な助言や支援ができるよう努めています。

活動を通じて、東京では見えにくい地域の実情や住民の皆様の思いに直接触れられることの重要性を強く感じています。今後とも国と地域をつなぐ立場として、雄武町の持続的な発展に貢献できるよう、引き続き全力で支援してまいります。

活用事例1 森町

「森林資源×地域産業の可能性を広げるためのミズナラを活用した洋酒樽生産への挑戦など、町の資源をいかした取組への伴走支援」

制度活用の背景

総面積の76%が森林で占められ、林産業を基幹産業とする森町では、道南地域で急速に拡大するナラ枯れという病害虫被害が町でも確認されたことから、ミズナラ資源の管理が喫緊の課題となっています。一方で、近年、国産ミズナラの丸太価格が高騰しており、特に日本産ウイスキーの香りの決め手となる洋酒樽への需要が急増していることから、ナラ枯れの未然防止のための資源管理と併せて、ミズナラを洋酒樽に活用するなど、ミズナラを地域資源としていかす新たな取り組みを目指すこととしました。また、林産業で深刻化する担い手不足に対応するため、若年層の担い手育成にも取り組むこととし、こうした産業振興を進めるうえで不足していた専門的なノウハウに関する支援を受けるため、伴走支援制度を活用することとしました。

支援の流れ

支援チームが最初から絞られていたため、まずは町を知ってもらうことを念頭に、最初の現地訪問では林産業だけではなく、農業、水産業等の地域産業の状況を視察し、町の課題分析をしてもらいました。2回目の訪問では、役場職員や関係者との意見交換を通じ、潜在的な町の課題を把握するとともに、各種課題の解決に向けて各省庁の補助金の活用などの助言を受けました。3回目以降には、事業実施に向け、地域未来交付金の活用を念頭に、関係機関との連携や取り組むべき施策を検討し、課題の整理や事業の推進体制の構築、工程表等の作成や、KPI設定などの助言を受けました。通常時は定期的なオンライン会議で進捗状況の確認や今後の方向性について協議し、メールで日常的な連絡や資料の共有を行いました。

昨年度の成果と今後の展望

伴走支援制度活用による大きな成果として挙げられるのは、支援官との意見交換を通じて、行政内部だけでは気づきにくい視点を獲得することができたことです。こうした視点を得たことにより、当初想定していなかった地域未来交付金の活用など、新たな財源確保にもつながりました。

手探りの状態でスタートした洋酒樽プロジェクトですが、関係者との協議や情報収集を重ねる中で、初年度は本事業の趣旨に賛同する地域の事業者と連携することができました。支援制度活用2年目となる今年度は、交付金を活用しながら、地域事業者と加工方法、製造工程などについて調整を行い、試行錯誤を重ねながら洋酒樽の試作品を製作しています。今後は、試作した洋酒樽を用いた試験蒸留を実施し、森町のミズナラが樽の材料として適しているか検証を進め、洋酒樽の仕様を確立し、安定的に供給できる体制の構築を目指します。将来的には、取引する蒸留所ごとの要望に応えた洋酒樽を提供し、森町産ミズナラの価値を大切にしてくださる蒸留所との、安定した関係の確保につなげてきたいと考えています。

また、洋酒樽は木材利用の中でも付加価値が高い一方で樽材として使える板材は丸太全体の1割程度に限られます。そのため、樽材以外に建材や家具材、端材として活用するなど、丸太を

余すことなく使い切ることで高付加価値型の事業展開を目指すこととし、連携協定先の大学生をインターンとして受け入れ、端材のアップサイクル製品の製作やその販売なども行う予定です。このように、森町産のミズナラの調達・製材、洋酒樽の製作・販売までを町内で一気通貫で行うことで、資源循環型の林産業を目指していきます。

担当者からの声

当初は専門的なノウハウの支援を期待していましたが、専門的な助言を受けるよりも、支援官に地域課題を共有し、一緒に考えてくれるパートナーとなっていたことが重要と感じました。また、事業担当課だけで完結せず、関係課も含めて課題を幅広く共有することで、新たな補助制度や連携の可能性が見つかりやすくなります。



▲森町役場農林課の佐藤参事



▶ミズナラの端材を活用したウイスキーワッド（スティック）

【R7活動実績】

- 現地訪問：4回
- オンライン会議：5回
- 町長の省庁訪問：2回

【地方創生支援官】

金融庁、防衛省、農林水産省

▶ナラ枯れによる被害を受けてミズナラ



▶町内の小学生がミズナラの苗木を補植している
▲採伐されたミズナラ材、樽材の製作には特殊な板材加工が必要となる

活用事例2 むかわ町

北海道胆振東部地震からの創造的復興・創生へ！ 北海道むかわ町の多核共創による 未来へつなぐまちづくり

制度活用 の経緯

むかわ町では、平成30年に発生した北海道胆振東部地震により多くの被害を受けた鶴川地区、穂別地区のまちなか再生事業「復興拠点施設等整備事業」に着手しており、震災により加速化した人口減少を抑制し、失われた賑わいを取り戻し、単なる復興ではなく未来へつなぐまちづくりに取り組み、創造的復興・創生の実現を目指しています。町では、こうした創造的復興・創生の実現に向けて、国から財政的な支援などを受けながら進めていましたが、地方創生伴走支援制度が新たに創設されたことから、こうした人的支援も活用しながら、実現に向けた課題解決を、より迅速に、そして多角的に進めていくこととしました。

取組について

制度申請時は、主に鶴川地区の道の駅をはじめとした復興拠点施設等整備に向けたエリアデザインの策定を中心に支援を受ける予定でしたが、それに限定するのではなく、支援官の現地訪問や意見交換を通じて、町の課題に応じた幅広い支援を受けたいとの考えから、支援内容を拡充しながら進めました。



▶▶ 町内視察の様子



4月に支援官が内定し、まずは課題の整理・見える化のため、町内外の関係者とのオンライン意見交換を実施し、6月の1回目の現地訪問では、一次産業事業者や町内関係者に町の現状や課題についてヒアリングを実施しました。支援官が実際に町を訪れる中で、空港との距離が近い立地にも関わらず、交通の利便性が良くないなどの気づきがあり、こうした課題も意識し、「鶴川地区まちなか再生」を主なテーマとしながら、穂別地区の交通弱者への支援である「ほべつサポート交通」への支援もお願いすることになりました。また、町の総合計画を新たに策定するタイミングであったため、「第2次むかわ町まちづくり計画後期基本計画」の策定についても助言を受けることとなりました。

昨年度の成果と今後の展望

主なテーマとして支援を受けることとした「鶴川地区のまちなか再生」では、「むかわ町復興拠点施設等整備事業Ⅱ鶴川地区エリアデザイン」の策定に際し、エリアデザインの素案が町民が求めるものと合致しているか、道の駅の施設の構造・機能の方向性などを支援官から助言を受けながら、3月に策定しました。併せて、新たな総合計画の策定でも、支援官が町民説明会に参加し、町民に向けて、まちづくりに関する助言を行い、3月に「第2次むかわ町まちづくり計画後期基本計画」を完成することができ、支援制度の大きな成果となりました。その他では、穂別地区の「ほべつサポート交通」の今後の運営について、地域公共交通の優良事例の紹介や、国や道への相談の場を設けるなど、現地の声を聞きながらの支援が行われました。今年度も支援を受け、策定した鶴川地区のエリアデザインを具体化するため、「まちなか再生」を重点テーマとし、引き続き専門的な助言を受けたいと考えています。



▲「第2次むかわ町まちづくり計画後期基本計画」町民説明会の様子

併せて、鉄道の維持に向けた利用促進のための取組など、財政的支援策の助言を受けながら進めていく予定です。また、町の人材育成のため、支援官と若手職員の意見交換なども実施しており、町の課題や良いところなどを双方で学び合い、若手職員の育成にもつながっていく予定です。このように、支援官の専門性をいかした新たな取組も進めています。

担当者からの声

支援官は、課題解決を支援したいという強い思いを持っていて、自治体側が課題や要望を率直に伝えることにより実効性の高い支援につながると感じました。積極的なコミュニケーションにより、信頼関係を早い段階で築き上げる事が大切です。

支援開始時点でゴールを細かく設定しすぎる必要はなく、支援官と対話を重ねながら地域の課題を共有し、新たな視点や提案を取り入れることが、より効果的な支援につながったと感じています。支援官と柔軟に支援内容を発展させていくことが、制度を有効に活用するポイントだと思います。



▶ むかわ町総合政策課 前田主査

【R7活動実績】

- 現地訪問：4回
- オンライン会議：11回

【地方創生支援官】

財務省、文部科学省、国土交通省

▼増毛小学校旧校舎
道内最古の木造校舎として、北海道遺産に指定



▲国稀酒造
北海道で最古の造り酒屋。明治15年、初代本間泰造が創設し、秀峰暑寒別岳の伏流水を使った辛口の酒が人気。昨年から新たにクラフトビール事業に取り組み。



▲取材にご協力いただいた
増毛町企画財政課 宮本課長補佐（左）
増毛町地域おこし協力隊 鈴木さん（右）



ましけ
増毛町

オール増毛で取り組む
「増毛×レトロ」

山の恵みプロジェクト

増毛町は留萌管内南部に位置する人口約3千4百人の港町です。町名の由来は、アイヌ語で「カモメの多いところ」を意味する「マシケイ」が転じたものと言われています。

今回は、町の豊かな地域資源をいかし、地域の課題解決に挑戦する、増毛町の「山の恵みプロジェクト」について取材しました。

昨年行われた農林水産省の山村振興対策事業「山の恵みプロジェクト（※）」のビジネスコンテストにおいて、「増毛×レトロ」をコンセプトとした増毛のプランが全国10団体の中で最高位を受賞しました。「増毛×レトロ」をコンセプトに、食、自然、歴史を掛け合わせながら、町全体をフィールドとした事業を官民連携で進め、地域が持続的に稼ぐ力を高めていくことを目指す取組を取材しました。

（※）「山の恵みプロジェクト」は、農林水産省が山村地域の事業者に対し、地域資源を活用した商品・サービス開発の支援を行い、事業者の自立化を目指す取組です。

「山の恵みプロジェクト」の提案

「山の恵みプロジェクト」のブランドのきっかけは、現在、町の地域おこし協力隊として活動する鈴木さんが、増毛町の魅力ある地域資源の活用を増毛町に提案したことでした。

鈴木さんは、地域における商品開発などに取り組む会社を経営しており、協力隊として採用される以前に道内地域の課題を研究し、その課題解決に

向けた取組を行うスタートアップ企業と地域のマッチングを行う大学のプロジェクトの一端で増毛町を訪れました。そこで、海や山の豊かな恵み、地理的な魅力、地域で暮らす人々など、さまざまな魅力が一つの町に凝縮されている増毛町に触れたことで、増毛町で自然をいかしたまちづくりを進めたいとの思いが生まれ、大学のプロジェクト終了後、「増毛×レトロ」というコンセプトを軸に「①地域資源の高付加価値化」「②歴史・レトロ資源をいかした価値創出」「③自然・アウトドア体験の強化」「④販路拡大と市場開拓」「⑤担い手確保と人材育成」という5つの柱のもと進める「山の恵みプロジェクト」を活用した地域活性化プランを増毛町に提案しました。

増毛町の課題

増毛町では平成28年12月にJR増毛線が廃線しましたが、旧増毛駅舎の復元や観光拠点の整備などの取組を進めたことで、観光入込客数は大きく減少することなく推移し、令和6年度の観光入込客数は32万7千人と、新型コロナウイルス感染症の影響を受ける前

の水準まで回復しています。一方で課題としているのは観光客の消費額の低さです。隣の留萌市や北海道全体の消費額に比べると観光客が町で消費する割合が少なく、地域の稼ぐ力を高める必要性がありました。増毛町企画財政課の宮本課長補佐は、「J・R留萌本線の廃線以降、観光客を『惹きつける』ことについては一定の成果があらわれた。次は、まちを『潤す』観光客に消費してもらうことだ。」と話します。こうした状況のなか、豊かな地域資源を活用し、商品やサービスの開発を通して地域内の所得や雇用の拡大を目指したまちづくりという鈴木さんの提案と、観光客の消費につなげる取組を模索していた増毛町の思いが一致したことで、「山の恵みプロジェクト」が動き始めました。

「山の恵みプロジェクト」 始動

本プロジェクトを実施するにあたり、増毛町では「増毛町山の恵みプロジェクト地域協議会」を設立しました。町の歴史と歩む「国稀酒造」を筆頭に、商店、水産加工、果樹園、農家など地元の仕事者で構成されています。官民が一体となって、果樹や海産物、米、地酒などの食資源、暑寒別岳や日本海などの自然資源、レトロな町並みや建造物など歴史資源を掛け合わせた、多岐にわたる事業を展開し、新たな価値の創出に取り組みます。このプロジェクトは、単なる商品開発ではなく、町

全体をフィールドとした体験観光や、人材育成、販路開拓までを一体で行い、地域が持続的に稼ぐ力を高めていくことが重要と考えています。

人材育成事業

プロジェクトの柱の一つ、「担い手確保と人材育成」では、今年7月に学生と地域が継続的につながる「関係人口の創出」の取組として、日本航空㈱との連携による「JALガクツナプロジェクト」を実施しました。本プロジェクトは、日本航空㈱が学生と地域をつなぎ、地域の魅力や課題を若者の視点から発信する取組です。増毛町では、全国から集まった6名が町に2週間滞在し、午前中は、さくらんぼの収穫体験、午後は、フィールドワークなどを行い、果樹農業を取り巻く課題と解決策についてプレゼンテーションを行いました。また、北海道大学「新渡戸カレッジ」との連携では、「キャンパスから海辺の町へ」というプログラムを実施し、学生たちが地域づくりの会社の起業家という想定のもと、増毛町を活性化するためのビジネスやプロジェクトを提案しました。町の関係者からは、現地調査を行い、事業者や住民の声を反映している点や、収益を見通した事業モデルである点を高く評価され、「今後、学生と協働して実現させたい。」といった声も上がりました。

鈴木さんと宮本課長補佐は、「増毛町で挑戦したいという思いを若い世代

から引き出していきたい」と話します。「人が人を連れてくる」流れを作ること、人が育ち、人が残る仕組みを整えていきます。

今後の取組

今年度、人材育成以外にも地域資源の高付加価値化の取組として、「鹿肉ジンギスカン」の開発が進んでいます。農家を悩ます獣害対策と、特産品（鹿肉、リンゴ・はちみつ・地酒等）

の活用を組み合わせ、商品化を目指しています。まずは5種類ほどの商品化を目指し、展示商談会等で出展する予定です。

事業を進める上で大切にしていることを鈴木さんに聞くと、民間企業との連携はもちろん、「一人ひとりとつながること」だと言います。「商品一つの開発であっても、学生の受入ひとつであっても、目の前のことを一つ一つ取り組んでいくことを大切にしたい。こうした取組により、増毛町の

『ファン』を一人でも多く増やしていきたい。その『一人』とのつながりを大切にし、長く増毛町を好きでいてもらうことが、やがて『人が人を連れてくる』流れになるのではないか。」と語っていただきました。今後も、「増毛町で稼ぎ、暮らし続けられる未来」のため、町内外を巻き込みオール増毛で取り組みます。

①	①地域資源の高付加価値化 「素材を売る町」から「価値を届ける町」へ	- 果樹・米・海産物などを活かした商品開発 - 貝類・酒粕・麦芽粉などの未利用資源の商品化 - ジビエ（鹿肉など）を地域課題解決と再立した形で活用 - 地元企業や大学生との連携によるブランド設計 「増毛×レトロ」シリーズの展開	
②	②歴史・レトロ資源を活かした価値創出 増毛のレトロな街並みや歴史的建造物を活かし、「見る観光」から「感じる観光」へ	- 歴史建築物の保全と活用 - プロジェクションマッピングや歴史映像製作 - 黒板アートや体験型イベントの開催 - 北海道の増毛港線無線化事業と連動した景観整備と拠点の充実 - レトロを活かした街歩きコンテンツ開発 - 単なる商品開発ではなく、ストーリー・販路まで一体で設計 - 街全体を一つの「物語空間」として再構築	
③	③自然・アウトドア体験の強化 暑寒別岳、日本海、果樹園などの自然資源を活かし、体験型観光を強化します。	- 登山・キャンプ・シーカヤック体験 - 果樹狩り・収穫・加工体験 - 自転車イベントの開催 - 登山・アウトドア関連商品の製作 「来て寝て帰る」ではなく、「また来たい」仕組を整えます。	
④	④販路拡大と市場開発 都市部との接点で、町外へ価値を届けます。	- 東京グルメショー・ギフトショーなど展示商談会出展 - ポップアップショップ・チャレンジショップの展開 - ECサイトとふるさと納税の連携・運営 - 現地決済型ふるさと納税の導入 - 町外で売れる仕組みをつくり出します。 - SNSによる情報発信強化	
⑤	⑤担い手確保と人材育成 事業を続けるためには「人」が不可欠です。	- 地域おこし協力隊の戦略的活用 - 大学との連携・学生受入 - 短期就労・おためし滞在 - 関係人口から定住人口への導きづくり - 人が育ち、残る仕組みを整えます。 - 移住PRと関係人口拡大・定住促進住宅整備	

地域のキーパーソン

地域を創る人 編

うらほろ
浦幌町

ひかる
小松 輝 さん

徳島県から浦幌町へ

徳島県出身の小松さんは、県内の大学で中山間地域のまちづくりについて学ぶ中、インターンシップのため浦幌町を訪れたことをきっかけに、大学を卒業後、地域おこし協力隊として同町に着任しました。着任後は豊かな自然をいかした農泊等の観光事業の立ち上げに携わり、その経験をいかして地域にもっと貢献したいとの思いから、任期中の3年目、令和元年に町内で宿泊業や地域内事業者の採用支援を行う「株式会社リペリエンス」を設立しました。

浦幌町での取組

当初はツアー企画などを通じて浦幌の魅力発信を行っていましたが、地域に人呼び込むためには滞在できる拠点が必



▲株式会社リペリエンス 代表取締役 小松 輝さん
同社のほか、「合同会社Ofuroto」代表社員や道東を盛り上げる一般社団法人「ドット道東」の理事なども務める。



浦幌町に人の流れを生み出す
目の前の「あったらいいな」を形に

要だと感じ、令和3年にゲストハウス

「ハハハホテル」を開業しました。直近3年間では年間約2千人の利用があり、地域に継続的な人の流れを生み出しています。

その翌年には就業促進ポータルサイト「つつらうら」を開設。町内の求人や暮らしに関する情報に加え、酪農や漁業、木炭作りなど多様な短期就労体験情報を掲載し、令和7年には延べ265人が体験に参加しました。これにより年間約10人、直近では12人もの新規雇用につながり、関係人口・定住人口の創出に寄与しています。

令和4年には町内事業者とともに合同会社Ofuroto(オフロト)を立ち上げ、町内の温泉施設「うらほろ留真温泉」の指定管理も開始。元々指定管理を受託していた町外企業が撤退することとなり、「町の温泉は町内で支えたい」という思いから運営を引き継ぎました。

さらに令和5年には、空き倉庫を改修した商店兼カフェ「トリノメ商店」をオープン。町内に少なかった買い物や滞在の場を補完するとともに、住民同士の交流拠点としても機能しています。

町に起った変化

小松さんの取組は、地域にさまざまな変化をもたらしています。

ハハハホテルでは、宿泊費と引き換えに業務を手伝う「ヘルパー」と呼ばれる仕組みを導入。ヘルパーに「つつらうら」に掲載された仕事を紹介したり、地域住民とのつながりを生み出すことで、一過性ではない関係性が築かれています。トリノメ商店では、建物の改修に延べ80人の町民が関わるなど、地域ぐるみでのプロジェクトとして進められました。

こうした取組を通じて、「若い人が増えてきた実感がある」と小松さんは話します。自身の会社「リペリエンス」も社員の多くが20代で構成されるなど、町の中で若者同士の横のつながりが生まれやすい環境が整いつつあります。



▲元・空き倉庫の「トリノメ商店」



▲「トリノメ商店」店内
雑貨や服、カフェスペースに加え、店主がセレクトした本が並び。



▲「ハハハホテル」の共有スペース
この建物、元は北海道森林室の独身寮だったそう。

浦幌町と小松さんのこれから

北海道十勝管内の最東部に位置する浦幌町は、広大な山林と肥沃な土地を有し、太平洋に面する自然豊かな町です。
そんな浦幌町で各種事業を立ち上げ地域への人の流れを生み出しているのは、株式会社リペリエンス代表取締役の小松 輝（こまつ ひかる）さんです。

今後は、「自分のように地域で挑戦するプレーヤーが増えていくといい。」と小松さんは語ります。町では近年、個人商店の閉店など、商店街の賑わいが失われる状況もあります。「そういった分野も含めて、新たにチャレンジする人が出てきてほしい。」と期待を寄せています。「浦幌町に来たときから、明確な将来像があったわけではありません。」と小松さんは話します。「こんなものがあつたらいいな。」という思いを起点に、ひとつひとつの取組を積み重ねてきました。「町の賑わいは、日々の積み重ねの中で少しずつ形になっていくもの。そうした実感をもとに、これからも地域に人の流れを生み出し続ける存在でありたい。」と、小松さんは考えています。

地域のキーパーソン

地域を創る企業 編

しもかわ
下川町

特定非営利活動法人
森の生活

森の生活の発足

特定非営利活動法人（NPO法人）「森の生活」は、4千7百ヘクタールの町有林を資産・価値として循環型森林経営に取り組み下川町で、自治体や森林組合の枠組みにとられない取組を進めるため、平成17年に町内の有志によって設立されました。設立当時の下川町では、森林を地域資源とした産業の六次化など、新たな森林資源の活用が模索されるところに、都市住民向けの林業体験と移住体験を組み合わせたツアーが開催され、森林や自然環境に関心を持つ人々が下川町に移住するなど、森林との共生に対する価値が見直される状況にありました。こうした状況を背景に、「森の生活」は、山村に軸足を置いた経済活動を通じて森と人とのつながりを回復させ、山村社会と自然環境を持続可能な形で次の世代に引き継ぐことを理念としています。



▲NPO法人 森の生活
代表理事 麻生 翼さん
大学の先輩にあたる初代代表を訪ねて下川町を訪れたことをきっかけに、関西での会社員等を経て森の生活のスタッフとなった。
平成25年から代表理事に就任。

森林を地域資源とした取組

創業当時から中心的に取り組んでいるのは、森林体験事業です。主に都市住民向けに下川町の森林に触れる機会を提供する森林体験のほか、町との協働による、町内の幼・小・中・高一貫の森林環境教育にも力を入れています。子どもたちが地元の森林の価値について理解を深められるように、森林や木材加工工場の現場に出かけていく体験型の授業を、学校の教育課程や学習内容と関連したプログラムになるように、学校と相談しながらカリキュラムを組んでいます。町の多くの子どもたちが高校卒業後に町外に出て行くことから、在学中にふるさとの自然を体感し、地元の大人たちと出会う機会を積極的に作ることで、この体験が子どもたちが生きていく上で大切な拠り所になって欲しいという願いも込められています。

また、町の雑木林「美桑が丘」^{みくわ}の管理者として、町内の子どもたちに自然の遊び場を提供しています。美桑が丘が目指すのは、北海道の里山的「森の公民館」のようなく、畑と森と馬（道産子）のいる自然環境をいかした場を住民主体で作りました。この「美桑が丘」は、令和7

森と人が育てる 下川町の新しい可能性



年に環境省の「自然共生サイト」^{（※）}に認定されました。このサイトに認定されることにより、企業の地域貢献活動として「美桑が丘」の生物多様性保全への支援を受けやすくなったことから、森の新たな価値を企業等につないでいきたいと考えています。^{（※）}2030年までに生物多様性の損失を止め、反転させる「ネイチャーポジティブ」を実現することが世界目標。法律で規制する保護地域だけでなく、民間等の活動により生物多様性保全が図られている場所を「自然共生サイト」として国が認定する仕組み。

人と事業が育ち、巣立つ

昨年、「森の生活」は設立20周年を迎えました。これまでに町内で独立したメンバーも多く、「森の生活」の事業を一部継承するなどして、組織の枠にとられないゆるいつながりで、関わりを続けています。「森の生活」のこれまでの歩みは、ひとつの組織が大きく成長しただけではなく、地域で人が育ち、それぞれの仕事へ巣立っていく歴史でもあります。下川町の森に惹かれて『森の生活』に入ってきた人が、町内外の人との関わりを通して自分がやりたいことを見つけて巣立っていくという意味では、

『森の生活』は新規事業育成や起業支援の役割があると思っています。」と

北海道上川管内に位置する下川町は、美しい自然と緑豊かな自然に囲まれた面積の9割を森林が占める町です。森を木材としてではなく、自然環境、人が集ま学ぶ場など、様々な価値を持つ資源として捉え、持続可能な地域づくりをしている、特定非営利活動法人「森の生活」代表理事の麻生 翼（あそう つばさ）さんに話を伺いました。

話す代表の麻生さん自身も下川町移住者。下川町には自分のやりたいことを実現させるために集まる移住者を受け入れる土壌が育っています。

下川町と「森」のこれから

下川町民へのアンケートでは、住み続けたいと答えた町民が8割にのぼる一方で、人口減少、人手不足、医療・教育、インフラ維持などの課題も山積しています。「だからこそ、先人が育ててきた森という自然資本をいかしていきたい。」と語る麻生さん。下川町の今後のまちづくりについて、「子どもにとって魅力的な場所ということ、それは人間にとって魅力的な場所。そのような場所を作るために人が挑戦できる「下川町ならではの」の価値を作っていくことが、これからの地域づくりにつながると考えています。」^{（※）}という思いを語っていただきました。



▲管理を行う美桑が丘では、町内外からの多くの子どもたちが馬（道産子）とのふれあいに訪れている。

北海道
教育委員会

地域を創る人づくり

北海道教育委員会では、北海道の教育課題の解決と地域創生の実現を目指しており、北海道教育推進計画の中では、地域と歩む持続可能な教育を実現するために、地域と学校の連携・協働を進めることを位置付けています。地域と学校が「目標」や「ビジョン」を共有し、様々な取組を進める中で、子どもたちには「これからの時代を生き抜く力」を育み、地域住民には「自らが地域を創っていく」という主体的な意識への転換を図っていきたくと考えています。

北海道MA+CH(ま+ち)プロジェクト

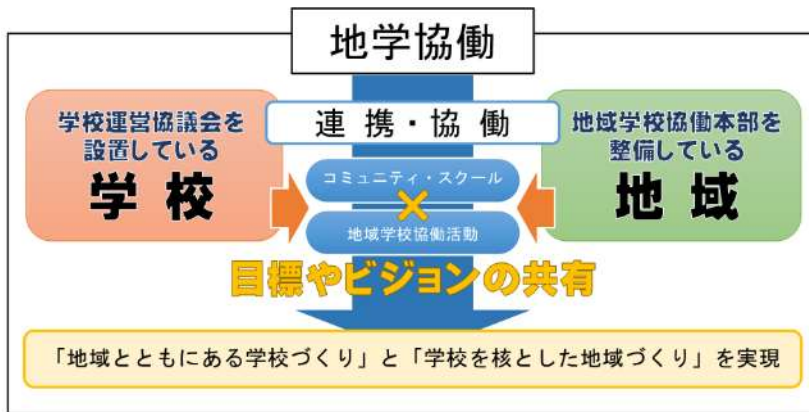
「地学協働」とは

北海道教育委員会では、「コミュニティ・スクール」や地域学校協働活動を「地学協働」と称し、地域と学校が相互にパートナーとして連携・協働する活動を積極的に展開し、双方のWin-Winの関係構築を目指しています。

地学協働は、地域全体で子どもたちの学びや成長を支えるため、地域と学校が連携・協働して行う様々な活動であり、子どもの成長を軸として地域と学校が意見を出し合い、学び合う中で、地域住民のつながりも強くなり、自立した地域社会の基盤の構築・活性化につながります。

MA+CHプロジェクト概要

「地学協働」を各地域で推進するため、北海道教育委員会では、令和6年度から、各管内に一つの道立高等学校を指定し、地域と学校がともに学ぶ取組を通して、地域と学校が連携・協働する体制を構築し、持続可能なまちづくりを進める人材育成事業に取り組んでいます。



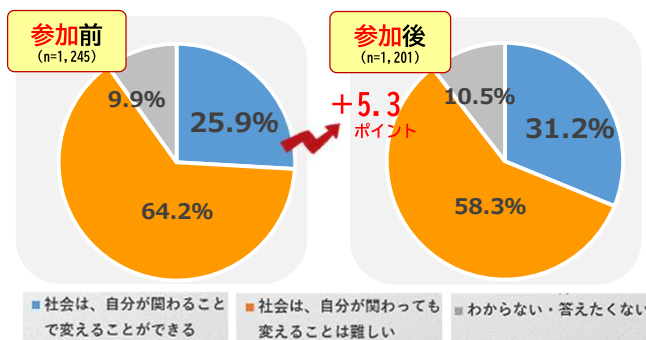
本事業では、「総合的な探究の時間」はもとより「生徒会活動」や「地域ボランティア活動」などにおいて、各地域における地域課題を解決するためのテーマを設定するなどして、持続可能な社会の創り手となる人材の育成を進めています。

事業の成果

各指定校には、地学協働コーディネーターを配置し、市町村の地域コーディネーター等と連携して、地学協働体制を構築するとともに、地域課題を解決するための活動の支援をしています。

下段のグラフは、令和7年度（2年次）に、本プロジェクトに関わった高校生の意識の変容を示したものです。「社会は、自分が関わることで変えることができる」という回答が、事前から事後にかけて5・3ポイント増加しました。

併せて、教職員からは「生徒が自ら課題を見つけ主体的・協働的に課題解決する力が高まった」という声が聞かれ、高校生と活動をとにした地域住民からは「高校生から大変刺激を受け、自分も地域のために頑張りたい」という思いになった」という声が聞かれるなど、高校生に「社会の変化に対応できる資質・能力」が育まれ、地域住民には「まちづくりを進める当事者意識」が高まっている様子がうかがえます。



【設問】※令和7年度 指定校生徒アンケート
皆さんの社会に対する意識について聞きます。皆さんは、社会に対してどのように考えていますか。一番当てはまる番号を1つ選んでください。

◆◆道内14の指定校◆◆

北海道月形高等学校
北海道恵庭北高等学校
北海道小樽桜陽高等学校
北海道追分高等学校
北海道富川高等学校
北海道松前高等学校
北海道上ノ国高等学校
北海道美瑛高等学校
北海道天塩高等学校
北海道枝幸高等学校
北海道清里高等学校
北海道音更高等学校
北海道弟子屈高等学校
北海道根室高等学校

上ノ国高等学校の挑戦

上ノ国高等学校では、ネイパル深川で実施された「高校生生徒会フォーラム」をきっかけに、令和7年度の生徒会執行部が「学校祭を町のお祭りの一つにしたい！」という目標を立て、町内の全世代が楽しめるように内容を見直し、コロナ禍前に途絶えていた打ち上げ花火大会を復活させるなど、学校祭を大きくリニューアルさせました。



▲8年ぶりに復活した花火大会

生徒会が、前述の目標を立てたことが、生徒会担当教諭から地学協働コーディネーターへ共有されると、地学協働コーディネーターは、生徒の「やりたい」に合わせて、プレゼンする場を設け、地域イベントを手掛ける関係者と生徒を引き合わせるなど、継続的に支援が行われました。

花火の価格がコロナ禍前の約2倍になっていることが判明する中、上ノ国町観光協会との意見交換では「地域にお願いするだけではなく、自分たちでできることもあるのでは？」という助言を受けることもありましたが、これにより「町民の学校に対する支援等に感謝を伝えたい」という活動の原点を見つめ直すきっかけとなりました。

その後も、地学協働コーディネーターの調整により、高校生が町民へブレゼンや募金活動を繰り返し行う中で、高校生の想いが地域へ伝わり、目標金額40万円に対し85万円を集め、念願であった花火大会を見事に復活させることができました。

学校祭の当日、幼児向けの縁日コーナーや昔踊り保存会のステージを含め、8年ぶりに復活した花火大会は、多世代を巻き込んだ地域の夏祭りとなりました。夜の校庭は、大きな花火が打ち上がる度に、高校生と取組に関わった地域関係者の充実感に満ちあふれた顔が照らし出され、地域住民のにぎやかな歓声に包まれていました。

その翌年（令和8年度）、後輩となる生徒会執行部は、先輩の想いを引き継ぎ、募金活動に加えてクラウドファンディングにも新たに挑戦し、100万円を超える資金調達目標を達成しています。



▲町民へ想いを伝えるプレゼン



▲休日募金活動を行う高校生

上ノ国町ではこの挑戦を通して、多様な関係者と協働して、プロジェクトを進める能力や、自らも当事者の一人として、主体的にまちづくりに参画する意欲が、高校生と地域住民の双方に育まれています。

コーディネーターの役割

上ノ国高校の挑戦では、生徒の行動力や、地域住民の学校祭への力強い協力や参画などが目を引きますが、その裏では、地学協働コーディネーターが、黒子として学校と地域をつなぐ役割を果たしています。

上ノ国高校の地学協働コーディネーターは、日頃から教職員との対話を大切にしています。その中で学校長が「コンソーシアム（地域住民等）による学校の応援団」の会議を開催する際に生徒を関わらせたいという思いがあることを把握していました。そのため、生徒が「学校祭を町のお祭りの一つにしたい！」という目標を立てたという情報を入手した際、即座に学校長へ「コンソーシアムで生徒の思いを発信させてみてはどうか」と提案し、一回目のプレゼンが実現しました。このプレゼンで生徒会メンバーは、参加者全員から背中を押してもらい、大きな勇気を得ました。これをきっかけに、次々とチャレンジの連鎖が始まります。

地学協働コーディネーターは、教職員や生徒の「地域とともに学びたい」という具体的な思いを把握し、タイミングよく地域資源（人や資金）と結びつける地学協働の立役者です。

学校に地学協働コーディネーターが配置されていることで、学校の教育活動と地域創生の充実につながる取組が効果的に実現します。

地域の声



上ノ国町長 工藤 昇 さん
(上ノ国高校応援団長)

夜空に咲いたあの花火は、学校祭を彩っただけでなく、上ノ国町に勇気と感動、そして明日への元気を届ける大きな力となりました。上ノ国高校生の皆さんは、地域の思いをひとつにしてくれました。

皆さんは、未来を担うだけでなく、今この瞬間の上ノ国町を支える、まちづくりの一員です。



学校祭企画運営サポーター
近藤 緑さん (フードスタイリスト)

やりたいことにチャレンジできる土壌でのびのびと活動する子どもたちと、それを応援する大人もまた学び、勇気をもらう。そんな温かい気持ちの循環が町の中に流れていることを、上高祭に協力する中で何度も体感しました。

花火に照らされた生徒達の誇らしげな顔、町のみんなの笑顔を私は一生忘れないと思います。

『なほみちカフェ』から

～地域創生のヒントを探る～



▲お話を伺った中頓別町コミュニティ施設「モトマツダ」。地域食堂や映画上映会場、ワインバーなど様々な用途で活用されている。

宗谷編



なほみちカフェ

鈴木知事が、北海道創生に向けて、様々な分野で活躍されている方をお訪ねし、その取組や地域への思いなどをお聞きしています。同行した職員から皆様にその様子をお伝えします。

令和8年5月8日訪問

中頓別町のワイン造り

編

今回はまず、中頓別町のワイン造りを目指した取組を紹介します。中頓別町では、新たな産業の創出に向け、平成29年からワイン用のブドウ栽培をスタートさせました。日本最北での挑戦は、天候不順による苗木の全滅など、多くの困難に直面しましたが、試行錯誤を重ねて、令和2年度に初めて実をつけることに成功しました。令和5年には、委託による試験醸造を行い、今年6月に試験販売でデビューしたワインは、7月から町のふるさと納税の返礼品になっています。



▲今年7月にふるさと納税の返礼品として登場。口当たりはなめらかで、山ブドウと交配された山幸らしいコクが感じられる。

北海道ワインアカデミー修了生で、ブドウ栽培を行いながら、昨年、「モトマツダ」でワインバーの取組を行った地域おこし協力隊の山口隊員からは、「宗谷管内におけるブドウ栽培が確立されていない中、中頓別町がブドウ栽培とワイン造りに挑戦していると伺い、心を弾ませながら中頓別町にやって来た。今後、中頓別町にワイナリーを設立し、『中頓別ワイン』という新たなブランドを創りたい。」とお話があり、山口隊員のワイン造りに対する熱い想いを伺いました。

また、小林町長からは、「ブドウの栽培当初は、苗木が全滅してしまっただけで、諦めずに生育状況の観察や分析を続けて、醸造までこぎ着けることができた。ワインを地域の新しい文化として認知度を高めていきたい。」と伺い、将来、町にとってワインが大きな財産になるとともに、中頓別町のみならず、宗谷地域全体の活性化にもつながるものであると感じました。今後、本格的な販売段階へ移行する中で、ワインという中頓別町の新たな魅力が道内外の方々に広く伝わることを期待しています。

当日の知事の言葉から

北海道がワイン産地として確固たる地位を確立していこうとしている中、中頓別町でワイン造りに挑戦していただいていることを大変嬉しく思います。

商品自体の良さはもちろんのこと、商品が完成するまでのストーリーやそこに携わる方々を知ってもらうことで、ファンになる方が増えていくと思います。多くの方に中頓別町のワインを知っていただけるよう、力を尽くしていきます。



▶地域おこし協力隊の山口隊員と中頓別町のワイン造りについて懇談。



▲今年開校75周年を迎えた北海道留寿都高校。全40名の生徒の皆さんが農業や福祉などの専門分野を学ぶ。



令和8年6月1日訪問

北海道留寿都高等学校編

次に紹介するのは、留寿都村にある北海道留寿都高等学校です。

この高校は、全国で唯一となる「農業福祉科」を設置しているほか、平成21年には介護福祉士養成校に指定され、「国際農業コース」と「農業福祉コース」の2つのコースで、農業実習や福祉実習を行うなど、特色あるカリキュラムで実践的な教育を行っています。さらに、入学から3年間で高校卒業に必要な単位を取得した後、4年次には、海外・国内での農業実習や介護福祉士国家試験の受験資格取得のための実習も行っています。

また、地域と連携した様々な活動も盛んに行われており、村主催のお祭りへの協賛やルスツリゾート内での花壇造成をはじめ、福祉施設や小・中学校、保育所との交流事業などにも取り組まれています。

治田校長からは、「生徒数は少ないが、熱意あふれる人材が多く、好機をつかむスピード感や少人数ならではの機動力があり、大変良い学校であると自負している。今年度は、村の高齢者の方のための雪かきや雪下ろし、登下校時のご

▲福祉実習でのベッドメイキング体験の様子。



み拾いを生徒たち自身で企画したほか、村の社会福祉協議会と一緒に畑を作るプロジェクトが予定されている。また、生徒たちが考えた商品を道の駅で販売する計画も立てており、今後は、こうした取組を通じて、全道のみならず全国に留寿都村と留寿都高校の名前を広めていきたい。」とのことがあり、熱意を持ってこの高校や村の活性化に取り組まれていることを感じました。

留寿都高校の取組が地域の活力につながることを期待するとともに、生徒の皆さんには、これからも様々なことを学びながら、素晴らしい高校生活を過ごしていただきたいと思います。

当日の知事の言葉から

夢に向かって懸命に努力しながら課題に向き合い、様々な活動をされているというお話を聞くことができ、嬉しく思います。生徒の皆さんが、今過ごされている時間は、一生の中で二度と同じ経験のできない貴重な時間です。留寿都高校で学んだことは、生涯自分を支える宝物になるので、それぞれの目標や取組をより深めて、自分自身の人生を切り拓いてほしいと思います。



▶収穫体験で収穫させていただいたアスパラを試食する様子。

地域に新たな風を吹き込む 地域おこし協力隊へのインタビュー

第十三弾

北広島市
地域おこし協力隊

幸 佳慧 さん
チャフエ

▼北広島市の協力隊となった経緯を教えてください。

北海道の豊かな自然や文化、観光地としてのポテンシャルに強い魅力を感じており、自身が培ってきたスキルをいかして、地域の魅力を直接発信する仕事をしたいと考えたのがきっかけです。

ワーキングホリデーや道内勤務で、道内の地域活性化に関わった際、地方創生の面白さと重要性に気づきました。

その後、台湾に戻りましたが、「大好きな北海道に自分のスキルで貢献したい」という思いが消えず、挑戦の場を探していた所、台湾の二コースで見た、新球場の開業などで未来に向けてダイナミックに変化している北広島市が地域おこし協力隊を募集していることを知りました。熱量を持って挑戦を応援し、発展を続ける北広島市なら、私の経験をいかし、国内外へ新たな魅力を発信する架け橋として、一緒に歩めると感じ、応募しました。



【プロフィール】
台湾台北出身。台北のホテルでマーケティング等を経験後、道内ホテルにてフロントや営業に携わる。独学で日本語能力試験N1を取得したほか、「北海道観光マスター」の資格も保有。

▼活動内容について教えてください。

入隊直後に、外国人観光客へのアンケート調査を実施したほか、エスコンフィールドのバックグラウンドをいかしたイベントとして、「食でつながる地域食堂」や「北広島・台湾日和2026」を企画・運営しました。他にも、市のプロジェクトやイベントで使用するデザイン作成やエンタメを活用した施策の提案をしています。



▲食でつながる地域食堂
台湾の家庭の味をベースに食べやすい味付け。賑わいと安心感が両立するよう、雰囲気づくりからこだわっています。

▼今後、任期中にどのような活動をしていきたいか教えてください。

北広島市の新しい魅力への「挑戦」として、主に次の4つのプロジェクトを進めていきます。

一つ目は「食でつながる地域食堂」や「北広島・台湾日和2026」といった地域内コミュニティイベントの開催などをフックに、インバウンド集客の土台作りと多文化交流を促進します。二つ目は、公共交通機関や徒歩で巡れる「特化型デジタルマップ」の作成や観光カードを通じて、市内へ観光客を誘引する仕組み作りです。三つ目は、エンタメを活用した、新たなイベントの企画で、持続的な仕組みとして軌道に乗せていきたいと考えています。四つ目は、地域資源を盛込んだ商品、ツアアの作成や国内外へのプロモーションの展開です。

▼協力隊の活動を通して感じている北広島市の魅力を教えてください。

北広島市は公園が多く、通勤中に豊かな緑を見られる環境があり、食べ物も美味しく、とても住みやすいです。そして何より、街全体に「何かに新しく挑戦する人を、みんなで応援しよう」という温かい気風があることが最大の魅力です。周囲の温かい人に囲まれる中で、市内周遊マップや観光グッズ、交流イベント、地域ブランド化といったアイデアに対しても、「まずはやってみよう」と応援し、迎え入れてくれる土壌があります。クリエイター、そしてマーケティングに携わる人間としても、非常に刺激的で活動しやすい街だと日々実感しています。

▼任期終了後の目標を教えてください。

これまでに培った経験や人脈、「北海道観光マスター」の知識をベースに、観光とクリエイティブの力で「北広島と海外の確固たる架け橋」となる存在を目指します。将来的には起業も視野に入れ、自身の強みであるクリエイティブ制作やマーケティング調査、商品造成のノウハウを融合させた専門性の高いクリエイターとして活動したいと考えています。今度は私が地域の事業者や自治体の挑戦を全力で「応援」し、地方創生に貢献することが目標です。

道内の地域おこし協力隊は、毎年増加し、地域活性化はもとより、地域の担い手確保など、人の流れをつくるきっかけづくりとして定着しています。全道各地で地域に新たな風を吹き込む存在として地域振興の様々な場面で活躍する隊員へのインタビューをシリーズで紹介し、活動を応援します。

第十四弾

釧路市
地域おこし協力隊

いわさく
大記さん



▼地域おこし協力隊として釧路市音別町地域で活動しようと考えたきっかけ・経緯を教えてください。

結婚を機に、自然に囲まれた環境で暮らしながら、自分たちの事業にも挑戦したいと考えるようになりました。そんな中で地域おこし協力隊という制度を知り、音別町地域の募集内容を見て、「自分の経験をいかせる」と感じました。もともと自然が好きでアウトドアにも親しみがあり、キャンプ場のPRや地域の情報発信という業務内容にも魅力を感じ、世界を旅してきた経験を、今度は一つの地域に腰を据えていかしてみたい、そんな思いで音別地域への移住を決めました。

▼協力隊の活動を通して感じている釧路市音別町地域の魅力を教えてください。

音別町地域で暮らして感じる一番の魅力は、人との距離の近さです。小さな町だからこそ、「なんもなんも」という言葉が自然に交わされます。困ったときはお互いさま、という温かい空気があり、地域の方が気軽に声を掛けてくださいます。発信を続けていると、「あそこも見てみたら?」「こんな場所もあるよ」と新しい情報を教えていただくことも多く、人とのつながりが地域の魅力を教えてくれます。私自身、地域おこし協力隊業務の一環としてアイスクリーム店を事業承継していますが、それも地域の方との何気ない出会いがきっかけでした。音別町地域では、人と人とのつながりから新しい挑戦が生まれる。そんな地域だと感じています。

▼現在の釧路市音別町地域での業務内容について教えてください。

写真や映像を制作するだけではなく、「地域の魅力をどう伝えるか」を考え、



▲キャンプ場のPR動画の撮影
キャンプをしたくなるような画を撮ることを意識しています。多くの人にキャンプ場の魅力が届くようにSNS発信をしています。

企画から発信まで一貫して取り組んでいます。現在は、音別町憩いの森キャンプ場のSNS運用を担当し、Instagramなどで地域の魅力を発信しています。また、地域のガイドや専門家の方々と連携し、野生動物や自然をいかした体験型観光コンテンツの企画も進めています。シマエナガやモモンガの観察、馬主来(バシクル)湖でのカヌー体験など、音別町地域だからこそ味わえる特別な体験を形にしたいと考えています。活動の中で何より大切にしているのは、人とのつながりです。地域の方への挨拶や何気ない会話から教えていただいた場所や出来事が、新しい企画や発信につながることも少なくありません。一つひとつの出会いが、音別という地域をより深く知るきっかけになっています。

▼業務に取り組む中で、手応えや、やりがいを感じていることを教えてください。

都市部で活動していた頃は、自分の仕事に対する反応を直接受け取る機会はありませんでした。一方で音別町地域では、発信した内容に対して地域の方や関係者からすぐに反応が返ってきます。その声を次の企画や改善につなげられるので、自分の仕事が地域にどう役立っているのかを実感できます。地域の方との会話から新しいアイデアが生まれ、それが実際の取り組みへと発展していくスピード感も、この町ならではの魅力です。

▼残りの任期、また任期終了後のことについて教えてください。

任期中はもちろん、その先も音別町地域との関わりを大切にしていきたいと考えています。自然や野生動物、食など、この地域ならではの資源をいかした体験型コンテンツをさらに育て、音別町地域ならではの魅力として発信していきたいです。また、事業承継したアイスクリーム店も地域に根付く店として育てていきたいと考えています。現在は学生スタッフも多く働いており、若い世代が地域で活躍できる場づくりにもつながっています。将来的には、自分だけが頑張るのではなく、地域の人たちが主役となって活躍できる環境を増やしていきたい、そして、自分が移住して良かったと感じた経験をいかし、二地域居住など新しい暮らし方にもつながるきっかけをつくっていかれたらと思っています。



【プロフィール】

幼少期はシンガポールやドイツで過ごし、神奈川県で学生時代を送った。大学卒業後はフリーランスフォトグラファーとして国内外で活動し、企業や行政の広報撮影のほか、被災地、難民支援など、さまざまな現場で写真・映像制作に携わる。世界各地を旅しながら映像コンテンツの制作・販売にも取り組み、その経験をいかして現在は釧路市音別町へ移住。写真や映像制作だけでなく、地域資源を生かした観光コンテンツの企画や情報発信にも取り組んでいる。

ほしい情報がきっと見つかる！ 北海道移住に役立つ情報サイト・SNS

移住ポータルサイト 「北海道で暮らそう！」

北海道の市町村情報をはじめ、「しごと」や「住まい」など、暮らしに必要な情報をまとめて発信中！



Monthlyほっかいどう

北海道の移住関連イベントの情報が満載！！



「北海道で暮らそう！」 公式SNS

北海道の移住イベント情報など
随時配信中！まずはSNSで、北海道
とつながりませんか？



Instagram



Facebook



LINE

DOORS,hokkaido

道内各地のイベント、暮らしやコ
ミュニティ、新しい「かかわり方」
を実践する人たちの情報等、北海道
の関係人口情報を発信中！



北海道型ワーケーション ポータルサイト

個人・企業の皆様の多様なニーズに
オーダーメイドで対応する「北海道型
ワーケーション」をご案内しています。



公式YouTube 「移住だべさ！北海道チャンネル」

移住PR動画や移住者インタビュー、
北海道の仕事や地域でのワーケー
ション動画など100本以上公開中！



「創る」バックナンバーは、“ほっかいどう応援団会議ポータルサイト”へ

バックナンバーへ

ほっかいどう応援団会議

検索

URL : <https://hkd-ouendankaigi.jp/info/tukuru.html>